

# A Study of the History of Rugby Football

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/20235">http://hdl.handle.net/2297/20235</a>

# ラグビーの歴史について

——ラグビー・ユニオン設立から1880年代——

秦 修 司

## A Study on the History of Rugby Football

——From the foundation of Rugby Football Union to the 1880's——

Shuji HATA

### 目 的

本格的にラグビーフットボールの歴史に関して各時代の多くの資料を調査し、克明に順序をおって究明したのは Montague Shearman によって初めてなされたと言える。それらの調査資料をまとめた著書「Athletics and Football」が1887年にロンドンの Longmans, Green and Company から公刊された。

本書には英国が誇るラグビーとサッカーの両フットボールが長い年月を経て、ひとつの基根から分かれて創生されるまでの過程を中心として、更に英国の各有名なパブリック・スクール (Eton<sup>1)</sup>, Horrow<sup>2)</sup>, Winchester<sup>3)</sup>) の独特のフットボールの競技方法や形式が成立してきた史的状況と古代英国民のフットボールに関する感情やエピソード等にいたるまで詳細な調査がなされた興味深い叙述で満たされている。

Shearman は「Football」の第三章の The Rugby Union Game (294頁～333頁) において、主としてラグビー・ユニオン設立 (1871年) から1880年代のラグビーのゲームが経てきた段階を shoving 期, loose scrimmaging 期, passing 期の順で詳細に叙述している。

そこで本研究は Montague Shearman 著書の「Athletics and Football」の第三章の The

Rugby Union Game をとりあげ、ラグビーのゲームがラグビー・ユニオン設立時ごろから約四半世紀の間どのような段階を経て発達していったかを追究するものである。

### 本 論

#### I shoving 期

フットボールにおいてドリブリングのゲームの形態は多種多様であったけれどもラグビーのゲームは組織化されたスポーツになって以来、ランニングとタックリングのゲームがいつも行われてきた。その形態は少年たちが互いに投げとばしあっても彼等の上下肢に危険が及ばずに済む程充分空間がある場合に、フットボール本来のスクリメージングのゲームをフィールド・オブ・プレイに適用したものであると歴史的に認識されてきた。競技場は hurling across country<sup>4)</sup>のフィールド・オブ・プレイのように制限がないということがなく、エンドやサイドに境界つまり、ゴール・ラインとタッチ・ラインが設けられた。ボールがこれらラインを越してタッチ・ダウンされるとすぐにゲームはアウト・オブ・プレイとなった。ラグビーのゲームの本来の特徴は実際に生ずる危険な暴力性はどんなものでも取り除くということだけしか変らないままであった。しかしながら、ゲームが少

年から成人に伝播するとすぐに、さらにゲームを変更する必要が生じた。というのは、成人の脛や首はラグビー・ユニオンによってゲームの競技規則が明確に制定されそして公布される前にラグビー校のゲームでかって見られた多くのハッキング<sup>5)</sup>又はスクラッキング<sup>6)</sup>に耐えることができなかったからである。

ラグビーの初期のゲームは極めて単調なものであり、ラグビー・ユニオンの競技規則の様式をそのゲームを定着させる際に力づくというよりは技術を活かすよう改めてきたのは、極めてゆっくりとしたものであり試験的であった。1871年から1876年までのスコットランドとイングランドのライバルのチームの間でインターナショナル・マッチの名で権威づけられた *shoving match* が行われた。<sup>7)</sup>25名程の重量のあるプレイヤーたちが、5分間、互いにもたれかかっているようであったが、時々、ボールは偶発的にスクリメージ<sup>8)</sup>を組んでいるプレイヤーたちの強固な塊から解き放たれ、残りのプレイヤーたちには彼等の間で若干の興味深いプレイがあったが、一方、スクリメージの塊は徐々に解かれていった。その問題についての明白な真実は *Rugbean*<sup>9)</sup>の *Big Sides*<sup>10)</sup>の伝統はプレイヤーとともに信条を残したままだったこと、そして、*Big Sides*が *shoving match* にならないようにした主要なことは、先ず第一にスクリメージにおいて動きまわることのできる少年たちの数を減少させたことであり、第二に、そのためにスクリメージを散開させ、ボールを移動させ続けたハッキングであった。ラグビー・ユニオンの設立以前、ラグビー校のゲームが行われていた12年位の間、*shoving*はラグビーのゲームが普及するのに重大な障害であった。一般的に試合は20名でなく15名で行われていたが、使用された競技場は狭すぎることがしばしばあり、プレイヤーたちは競技場は15名には充分すぎる程の広さであると思っていたが、いまだに、20名がチームの最少限であると考えていた。これまで、スクリメージのゲームの本質で

あるという考え方が進んできたので、プレイヤーがタックルされても、そう望まなければ‘down’と叫ばなくてもよいという規則で行ったクラブ・チームもあった。より重量のあるチームは、彼等のチームの1人のプレイヤーが抱き止められたとき決して‘down’と叫ばず、偶発的につまづくか、あるいは押されているチームが故意にスクリメージ全体をつまづかせることによってスクリメージが中断し、次に最終的にボールがdownされるまで相手のフォワード全体を押すといった戦術を用いた。ラグビー・ユニオンは1871年に設立されたあとすぐにボールがput downされるまでこのmauling<sup>11)</sup>を止めるよう決定し、競技規則の第18条<sup>12)</sup>は特にこのmaulingの誤用を処理するために作成されたものである。この第18条はそれ以後、常に改正されてきたのであるが、1874年に最初に作成されたときには、次のように謳ってあった。

如何なるプレイヤーもボールをかかえているか又はボールを持って走っていてタックルされ、そしてボールが明らかにかかえこまれている場合、そのプレイヤーはただちに‘down’と叫んでその場所にボールを置かなければならない<sup>13)</sup>。

最初の競技規則は、ゲームの性格が変化しそれを防止する必要が生じた誤用が生じたために当然のことながら、時々、改正されてきたが、それら競技規則が極めて入念に起草されたことには疑いがなかった。1880年代後半、当然のこととして従っていた5ヤードのオフサイドの規則やボールがタッチから入れられる場所は、ボールがタッチ・ラインを横切ったところであって、ボールが最初に地面に触れた場所の反対側でないといったゲームについての多くの細かいポイントはまったくの常識となっていた。ラグビーのゲームの競技規則を最初に起草した者については確実なところは不明であるが、1572—3年、ラグビー・ユニオンの書記長を務め、その後、1878年から1882年まで会長を務め

た Old Rugbeian である A. G. Guillemard と初代 (1871—2 年) の書記長であり、リッチモンドのあらゆる類の競技スポーツの高名な後援者であった F.H.Ash が、主としてラグビーのゲームの最初の競技規則の起草を手がけたと言われている。

ラグビー・ユニオンの競技規則は極めて適切にハッキング、トリッピング、スクラッキングを廃止した。スクラッキングとは相手の首に腕に巻きつけてねじり、相手に down と叫ばせることである。しかし、これらの慣行すべてを、特にハッキングを廃することは、ゲームを tight にし、loose のスクリメージにおいてしか発揮することのできないフォワードのスキルフルなプレイとほとんど効果のないものにしがちであった。しかし、旧式のシステムを存続させたままにいたために、イングランドとスコットランドとの1871年から1876年までの国際試合において20人制をとどめることになったのは疑いのないことであった。20人制での試合のために選出された身体の大きなフォワードは強く重量のあるプレイヤーであり、腕力と体重がないことには、そのプレイヤーはフォワード集団の中で強い印象を残す機会ほとんどなかった。その結果、旧式の制度のもとでの典型的なフォワードはどのようにして shove するかを知っているプレイヤーであり他のことは何も出来ない可能性が大きいということになった。事実、ラグビーのゲームの主要なプレイヤーたちに印象づけられた Big Sides の伝統的な概念が極めて強かった。1875年後半にある作家が半ば公式の出版物であると称した Football Annual はその Hints upon the Two Styles において男性的なゲームを行おうとすれば20人制で行うべきであるといまだにキャップテンに助言していた<sup>16)</sup>。しかしながら20人制は、この時までには、その年の古典的な試合以外はすべての試合において廃された。1875年、冬、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の関係者は Inter Varsity の試合を20人制でなく15人制で行うこ

とに同意した。翌1876—7年のシーズン、イングランドとスコットランドのユニオンも試合を15人制で行うことに従った<sup>17)</sup>。しかしながら、shoving 時代と称してきた最初の時期は、1876年まで続き、この時期、軽量でスピーディなフォワードはめったに存在しなかった。フォワードのプレイヤーの性格もフィールドの残りのプレイヤーの配置や競技様式に影響を及ぼした。現在では昔のゲームについてほとんど回想することができないので、English twenty<sup>18)</sup>の時代においては、どのようなやり方でゲームを行っていたか記する価値があるかもしれない。

クラブ・チーム間の試合は、1880年代後半は15人制で行われていたが、フォワードの競技様式は1880年代後半と異っていたばかりでなくフィールド上のバックのプレイヤーの配置も異っていた。攻撃プレイの大部分はハーフ・バックに依存しており、防御プレイはフル・バックだけに頼っていた。スクリメージ後方には二つの部類だけしか、つまり、ハーフ・バックとバックスの部類しかなかった。ハーフ・バックスを2名、バックスを3名、そして残りの10名のプレイヤーをフォワードとするのが最初の考え方であった。ゲームの最初の発展は、バックスの2名のプレイヤーの前方に彼等を両側にしてセンター・バックを配置し、そのプレイヤーが相手バックスのドロップ・キックを受けて、時々走って攻撃するようにしたことであった。この時期のフォワードはクスリメージを tight にして相手チームを押し込むよう最大の努力を払うよう期待された。コンパクトなスクリメージから適当な距離を置いて立っているハーフ・バックスは、味方フォワードに、スクリメージをしっかりと押し、押しがあまり速すぎないように、そしてスクリメージを強固にするよう励ました。すでに引用した権威は次のように述べている。

スクラメージにおいて、ボールがよりよく目で追えるように頭を下げるよう命じられているプレイヤーがいるが、頭を下げているプ

レイヤー1人によって2人分のスペースを所有するので、そのために塊がばらばらにならないようにする方策が必要である。スクリメージは、すべてのプレイヤーが自分の前にいるプレイヤーをしっかりと押し、身体と脚を密着させ、相手の同じ塊の重量に耐えるしっかりと固められた塊を形成するようにしてできるだけコンパクトに形成すべきである。……目標とすべき重要なポイントは、ボールが相手の方向に進んでいかないようにすることである<sup>19)</sup>。

当然のことながら、スクリメージはブレイク・アップするのに時間がかかるよう形成されているので、スクリメージ後方にいる双方のチームのプレイヤーは、たいていの場合、フォワードの集合体が完全に解かれる前に、ボールを持ってスクリメージから離れていった。スクリメージ後方にいるプレイヤーはランニングやタックリングのプレイを行ったが、フォワードはゲーム中での彼等の第一の役目であるスクリメージングを行った。しかし、すべてのゲームの経過が必ずこのようなものであったのではなかった。二、三のクラブ・チームの戦術は他のクラブの戦術と異っており、除々に loose play の長所が認識されるようになった。

一つ又は二つのことが、そうでないとそれが継続した以上に tight なスクリメージのゲームのまま続かせる傾向にあった。プレイヤーが相手に抱きかかえられるとすぐにボールを put down するのはよくない形と看做された。一つには、走者は必ずと言っていい程スクリメージ後方のプレイヤーであり、そのプレイヤーはフィールドの自己のポジションに戻らなければならなかったし、スクリメージが集結するまで充分時間があったので、事実上、ボールは当然のことながら、スクリメージが充分形成されるまで決して put down されることはなかった。長い間、競技規則についての解釈で、プレイヤーがはっきりと抱きかかえられる (fairly held) 場

合についての論議があったが、必ず down と叫ばならないまでにはボールに対して少なくとも相手二人が働きかけていなければならないと多くが主張した。しかしながら、フットボールのやり方についてのこの規則は1878年に明確に表われたが、その時、競技規則の第18条<sup>20)</sup>は変更され、プレイヤーははっきりと抱きかかえられた時、ただちに down と叫び、すぐにボールを put down すること<sup>21)</sup>が義務づけられた。この競技規則の改正によってすぐに、ドリブルがフォワード・プレイの本質的な特徴になった。

しかしながら、フォワードがドリブルを用いなかった場合、ハーフ・バックスの全盛時代になった。その時、ハーフ・バックスはフィールドの英雄となり、スリー・クォーター・バックスは徐々に、着実にその重要性が増大していったけれど、あらゆる gallery play<sup>22)</sup>を行った。その場合、ハーフ・バックスはスクリメージから5～6ヤード離れて立ち、そのポジションの第一の必要条件是素早くスタートして相手のハーフ・バックスをかわして抜いていく能力であった。というのは、いったん相手のハーフ・バックスを抜いてしまったらゴールまでには相手プレイヤーが3名だけしかいなく、走者をつかまえようとする相手フォワードははるか後方になるからであった。ハーフ・バックスの役目は、林立している脚の間からボールが出て来るやいなや全速力でボールを持って抜き去ることであり、そして、スクリメージにあまり近すぎでいくことによってボールを拾い上げる時間が減少し、相手ハーフ・バックスの動きを見失うので、従って、スクリメージから適当な距離をとって下っておくことであった。そのように、フィールドにおいて最もよく見えるポジションはハーフ・バックスであったこと、そしてほとんどのトライ、ほとんどの感動的なタックル、そしてほとんどの栄誉はこれら幸運なハーフ・バックスのプレイヤーになった。

この時期におけるスリー・クォーター・バックスのプレイは1880年代後半のそのポジション

での競技様式と二、三の点で類似性を有していたが、攻撃はほとんどハーフ・バックによってなされパスはほとんどなされていなかったの  
で、スリー・クォーターにはなすべきことがあまりなかった。1875年の The Rugby Union Football Annual における Old Rugbeian<sup>23)</sup> による記事に、スリー・クォーターのポストには俊足でタックルが確実なプレイヤーを選ぶべきであり、バックのようにうまく抜いていく場合強力な走者として素早いスターターであることはあまり重要でない<sup>24)</sup> とある。昔のスリー・クォーターは相手フォワードに煩わされることがほとんどなく、相手のフォワード・ラッシュがあっても、そのボールに飛び込んでそのラッシュを阻止しなければならぬことはめつたになかった。従って、スコットランドがスリー・クォーターを2又は3名でやっていたさえ、English twenty はスリー・クォーターは1名で充分であると見ていた。スリー・クォーターに第一に期待されることはドロップ・キックに熟達していることで、その機会が到来したらドロップ・ゴールをあげることであった。

ラグビーのゲームにおいてフル・バックの競技様式は決して変化することがなかったし、決して変わり得なかったの  
で、この時期のゲームの下でのフル・バックについては記述することなほとんどない。フル・バックは純然たる防御のプレイヤーであるので、ドロップ・キックに熟達して  
いてタックルが確実でなければならなかった。

## II Loose Scrimmaging 期

1877年の国際試合において20人制から15人制になった<sup>25)</sup> あと、競技様式が急速に変化し loose game が流行するようになった。多くのクラブ・チームが loose game を採り入れたその  
栄誉があると主張した。ロンドンでの偉大なライバルであるブラックヒース・クラブ<sup>26)</sup> とリッチモンド・クラブ<sup>27)</sup> の間に新しい様式である loose game を確立したその栄誉についての論

争があったが、Shearman の見解では loose game はオックスフォード大学から生じたとしている。彼が1875—6年のシーズンロンドンでプレイしたあと、その年の春にロンドンの最強のクラブと対戦してオックスフォード大学のチームでプレイしたとき、loose game を行っているオックスフォード大学のフォワードが loose play の利点でブラックヒースとリッチモンドのプレイヤーたちを驚かしたのを Shearman が知っている。この時までには諸々の大学のチームは20人制から15人制に替えた。とにかく、クラブ又は州のチームが loose play を始めたその栄誉があると主張しようとも、身体が小さくずんぐりとしたフォワードがフィールド上に姿を現わし始め、"素早いフォワードのゲーム" の語がラグビーとの関係において聞かれ始めたのは1876年ごろからであった。

ゲームの競技規則についてなされ、そしてゲームの性格を変える助けとなった改正の一つについて、先ず叙述しなければならぬ。1875年以前は試合の勝敗はゴールの多さでしか決せられなかった<sup>28)</sup> のだが、これがラグビーの最初の競技規則であった。しかしながら、成人の間では生徒ほどにはプレイス・キックに熟達していないので、その結果、極めて多くの試合において得られたトライからまったくゴールがなされず、一方のチームがいくつかトライを得たとしても、その試合が引き分けになるのが普通であった。1875年に改正された競技規則では、一つのゴールは数多くのトライよりよいものであるべきであるが、如何なるゴールもなされなければその試合の勝敗はトライの数で決すべきである<sup>29)</sup> となった。そして、ゴールの重要性を減ずる労作が時々なされたが、この得点法が11年間続いた。その時以来、再度競技規則が改正され1886年の改正において、ゴールが3点、トライを1点に数え試合の勝敗は得点の多さで決定され、いずれのチームともゴール又はトライをあげなかった場合、その試合は引き分けとなる<sup>30)</sup> となった。

第二の、つまり loose scrimmaging の時期、フォワードはスクリメージ、タックル、ドリブル、素早いフォロー・アップを適切に行わなければならないかった。要求されるプレイヤーの9又は10名がいないクラブ・チームは、スクリメージのためのプレイヤー、そしてドリブルとフォロー・アップのためのプレイヤーを選ぶ必要性が生じた。しかし、チームはチーム全体として力だけに依存するのでなく機動力とパワーのコンビネーションを示すことが必要になった。以上のことが認識され、ゲームの勝敗は主として、うまくコンバインドされたフォワード・プレイによって決するようになるとすぐに、フォワードの目的はスクリメージを tight の状態にするのではなく、できるだけすみやかにスクリメージをブレイク・アップすることにあった。いったんスクリメージがブレイク・ダウンしたら、瞬時にボールがスクリメージから出されフォワードのコンバインド・ラッシュが開始された。この新しい loose scrimmaging のゲームが導入されるとすぐにすべてのフォワードは頭を低くしてスクリメージに入っていかなければならなかった。立った姿勢で無闇に押すことによってそのプレイヤーは益というよりは害になったからであった。とりわけ、フォワードはドリブルしてボールを足もとに保ったままにし、ボールを強く蹴りすぎて相手スリー・クォーターの掌中に入らないようにしなければならなかった。この時期のフォワードは頑丈で強いプレイヤーでなければならないが、足をうまくコントロールすることができなければならなかった。

tight scrimmaging のシステムが衰退していくにつれてハーフ・バックスの役割は攻撃が減少し防御が増大し始めた。ハーフ・バックスにはボールから適当な距離を置きスクリメージから離れて立っておく余裕はなくなった。というのはスクリメージからボールが出て来るとすぐに、相手の loose の scrimmager がボールに向かって殺到して来たからであった。その場合、

ハーフ・バックスの第一の役目はボールがスクリメージから出て来るとすぐに素早くボールを掴みあげ、走ってタッチヘパント・キックするか、その機会があればスリー・クォーターにパスすることであった。しかし、乾いたグラウンドでのスピーディな試合では、ハーフ・バックスにはスクリメージから離れて相手を抜いていく機会はほとんどなかった。loose scrimmaging のシステムの直接の結果は次のことであった。つまり、ハーフ・バックスに大きく要求されるのは敏捷性そしてボールを拾いあげる器用さになり、走るスピードは比較的重要視されなくなった。俊足のプレイヤーの適当なポジションはスリー・クォーター・バックスになり、足の速くないプレイヤーは上手に素早くドロップ・キックをすることができなければ、そのポジションではほとんど役に立たないようになった。

新しい loose scrimmaging のゲームが完全に入って来たときの最初の戦術の変化は、スクリメージの外側でハーフ・バックスを3名でプレイさせるという実験であった。しかしそれは充分には定着しなかった。しかし、ブラックヒース・クラブは1シーズンを通じてこのやり方で着実にプレイした。3名のハーフ・バックスのプレイヤーが互いのコースに入って邪魔することがしばしばあったので、すぐにそのやり方は失敗であることがわかった。この時代、必ず2名のバックスがプレイし、スクリメージの後方で7名のプレイヤーがプレイすることはフォワードのはなはだしい弱体化につながり、3名のハーフ・バックスの後方で1名のスリー・クォーターにすべての労作を任せることが望めなかったのは当然のことであった。従って、少しの間、スクリメージの後方ではハーフ・バックス2名、スリー・クォーター2名、そしてバックス2名の計6名のプレイヤーで、そしてフォワードが9名でゲームを行うことが定着した。最上のハーフ・バックスは、ボールを素早く拾いあげることとタックルが確実であ

ることであり、頑丈で柔軟性のある強くてずんぐりとしたプレイヤーであった。

しかしながら、loose game の真の特徴はそのスリー・クォーター・バックに与えた付加的な重要性であった。ほとんどのトライが真直ぐな走り込みで得られた時代では、防御は主としてバックに任せており、相手の走者が味方ゴールラインに達する前にタックルを任せることができた。しかし、この loose scrummaging 期においては、防御側にとって相手の一線となったフォワード・ラッシュが最も危険な攻撃であり、バックの単純な防御ラインに頼ることができなかつたので、スリー・クォーターはあらゆる犠牲を払って常にボールが前方にあるようにしなければならなかつた。そのように、実際に、スリー・クォーターには重要な防御の役割が増大した。又、スリー・クォーターには長い距離を走って攻撃することが増大してきた。ハーフ・バックはあまりにも loose scrumage に接近し過ぎているため、相手を抜いていくことができなかつたので、従って、ハーフ・バックは抜いていく機会のあるスリー・クォーターに常にパスをした。又、しばしばあることであるが、スリー・クォーターが相手を抜いていく機会は相手フォワードがドリブルで強く蹴りすぎたためにボールがハーフ・バックを通過してスリー・クォーターの掌中に入ったというような相手フォワードの無器用さから生じた。そのようにスリー・クォーターはドロップ・ゴールを狙ったり、相手をうまく抜いて相手陣へ走っていく数多くの可能性のあった後方での唯一のプレイヤーであった。スリー・クォーターにほとんどの攻撃の機会が生じ、主たる防御も形成したので、フル・バックにはなすべきことなほとんどなくなった。最初、あるクラブ・チームが、次に別のクラブが、バック1名とスリー・クォーター3名でプレイするという新しい慣行を始めた。スコットランドや北部地方のプレイヤーは、それが南部のチームに正規に採り入れられる前にそれを実行し始めていた。し

かし、1880年の冬までに、北部と南部の試合において両チームともバックを1名だけにしたが、南部はいまだにスリー・クォーターを2名にし、一方、北部は3名にした。しかしながらこのあとすぐに、主要なチームは一般的には第二番目のバック無しで済ませ、この五年間フィールドは1880年代後半の形態、つまり、フォワード9名、ハーフ・バック2名、スリー・クォーター3名、そしてバック1名の形態をとってきた。

### III Passing 期

叙述してきたゲームの第二段階つまり loose scrummaging の時期、ボールをパスすることの利点についてはプレイヤーたちによって認識されしかもパスの技術が開発され、1880年代後半のゲームを1880年又は1881年のゲームとはっきりと異ったものにしたのはほんの二、三年であった。ラグビーのゲームが変化した正確な時期を決めるのは容易でない。オープンへの長くて低いパスが、それが疑いなく1880年代後半においてそうであったように、プレイの際立った特徴になった。ゲームを行う様式はゆっくりと変化していったので、1880年代後半主要なクラブ・ゲームが行っていたゲームが、パスによって味方が有利になる場合、状況が悪くなる前にパスをすべきであることが第一の原則であるとプレイヤーに認識されることになる以前のゲームと、どれ程異っているか1880年代後半のプレイヤー自身は観客ほどは認識していなかつた。プレイしていた人々は、1882年から1884年にオックスフォード大学のチームによって示された素晴らしいパスのプレイによって新しい様式つまり、パスのゲーム様式に転向した。その時から1887年ごろ (Athletics and Football の書が著わされた) までにパスが大流行してきた。パスにおいて示される技術が非常にすぐれており、その技術と遂行する熱意に限りがなかつた。フィールドでゲームが開始されるのを待っているプレイヤーたちは、それがパスを流行する前



の彼等の習慣であったようにドロップ・キックの練習をしたりボールをドリブルするのではなく、キャッチボールをしたりボールを空中高くではなく地面からおよそ手の高さに手から手へと投げている。有能なハーフ・バックはボールを一度拾いあげて次に味方のスリー・クォーターにパスをするのではなく、ボールを地面から掃くようにして一つの動作で受け手の掌中に真真ぐに送った。フォワード、ハーフ・バックス、そしてスリー・クォーターは互いに競いあってパスをするよう試みたが、時々、ボールがオープンな達するまでに何度もパスされることがあり、そして走って相手を抜いて攻撃することによってフィールドを走る自己のスピードを示す試みがなされた。そのようなゲームが、しばしば行われ過ぎ、雨の日にはパスのシステムが失敗することがよくあった。しかしながら、パスのシステムがより大きな利点をもたらしたのは明らかであった。

ラグビーのゲームの喜びは、それが模擬の戦争に似ていることによって生じた。Carew がそれについて述べたように、ラグビーのゲームは戦争のある種の機略に事欠かない<sup>31)</sup>だけでなく、突進していく攻撃、屈強な防御、格闘、打倒、再び立上って敵に向かっていくことなどにおいて何か戦争の人を寄せつけない喜びがあった。高度に練り上げられたパスのゲームは引き合うかどうかについては決めるのが容易でなかった。批評家たちはパスの利点について論議しより多くの利点があると確信している者もおれば、将来はパスは減少すると考えている者もいた。しかし、パスが引き合おうと引き合わないだろうと、ハンドボールの綿密に仕上げられたシステムは非常に長い間ラグビーのゲームの楽しさをそこなってきた shoving のシステムのように、プレイヤーにとっては不快なものになるだろうと Shearman は述べている<sup>32)</sup>。近代のパスのゲームに短所がもう一つあるのも明らかであったが、これはすべてのプレイヤーのパスがより正確になる時に消失するかもしれない特

徴であった。訓練を積んだ審判の絶え間ない注意深さしかボールが前方にパスされたかそうでないかの論争を妨げられなかった。事実、この種の問題についての論争や不平不満はアソシエーションのゲームのオフ・サイドについての同じような論争と同様に激しいものであった。しかし、パスの貴重な技術の根本原理を理解することがすべてのプレイヤーにとって必要条件であり、パスは最も重要なものでないにしても1880年代後半のラグビーのゲームの本質的な特徴であった。

#### ま と め

ラグビー・ユニオン設立時ごろから Shearman によって「Athletics and Football」の書が著された1880年代後半までのラグビーの由緒あるゲームについて叙述してきた。ラグビーのゲームが上流や平民のためのポピュラーなスポーツとして再登場した四分の一世紀の間、いくつか局面を経てきた。その最初の動きはスクリメージングを適正な割合まで減ずることであった。第二の動きは、システムチックなパスの重要性が増大したことであった。Shearman は「ラグビーの真なる喜びを知らないばかりかスクリメージングの技術を理解できない俗人の多くは、ゲームには押しがまだ多くあると思っている」<sup>33)</sup>と述べ、「クスリメージの無いラグビーのゲームがどのようなものになるか想像するのは難しい。正真正銘の示唆は、ほとんどのプレイヤーにとって異論に思えるだろうが、しかし一つのことは相当の確実性を持って言えるのであるが、それは将来如何なる変化があろうとも、昔のスクリメージングの様式に戻ることがないことである。年々、ラグビー・ユニオンのゲームはよりスピーディに、そしてスキルフルになっており、しかも、昔よりはあまり男性的でないという徴候はまったく見られない。」<sup>34)</sup>と結んでいる。

## 注及び引用・参考文献

- 1) イートン校：英国 Eton にあるパブリック・スクールで1440年に創立。
- 2) ハーロー校：英国イングランド, Harrow-on-the Hill にあるパブリック・スクールで1571年に創立。
- 3) ウィンチェスター校：英国イングランド南部 Hampshire 州都, ウィンチェスターにあるパブリック・スクール。
- 4) hurling over the country のこと。フットボールの形成の代表的なもので, 数マイル離れた目標地までボールを運ぶために数十人が野原や川の中をものともしないで敵とぶつかりあいボールを奪い合った競技である。
- 5) 相手の脛を蹴ること。
- 6) 相手の首に腕を巻きつけねじること。
- 7) John Griffiths, *Book of English International Rugby 1871-1982*, Willow Books, 1982, pp. 11-19.
- 8) scrummage のこと。公式用語では scrummage であるが, 人々は scrimmage の語を用いていたので Shearman はこの語を用いている。
- 9) ラグビー校の卒業生及び在校生。
- 10) ビッグ・サイド。
- 11) モーリング。
- 12) quoted in Shearman, *Athletics and Football*, London, 1889, Appendix, p. 389.
- 13) Percy Loyds, *The History of the Laws of Rugby Football*, Walker 2 co., 1949, p. 121.
- 14) Percy Loyds, *op. cit.*, p. 133.
- 15) Percy Loyds, *op. cit.*, p. 207.
- 16) quoted in Shearman, *op. cit.*, p. 298.
- 17) John Grittiths, *op. cit.*, p. 19.
- 18) イングランドが20人制でラグビーのゲームを行っていたこと。
- 19) quoted in Shearman, *op. cit.*, p. 199.  
 原典：Some players are given to putting their heads down in a scrummage so as to look after the ball better, but it is a plan not to be commended as it loosens the mass, a man with his head down taking up the space of two. A scrummage should be formed as compactly as possible, every man pressing firmly on the man in front of him, bodies and legs close together, so as to form a firmly packed mass to resist the weight of a like mass of opponents... the great point to be aimed at being to stop the progress of the ball towards one's own quarters.
- 20) quoted in Shearman, *op. cit.*, Appendix, p. 389.
- 21) 原典：at once cry down, and immediately put it down.
- 22) 俗受けを狙ったプレイのこと。
- 23) ラグビー校の卒業生
- 24) quoted in Shearman, *op. cit.*, p. 301.
- 25) John Grittiths, *op. cit.*, p. 21.
- 26) Blackheath Football Club：ロンドンにあるラグビーのクラブで, 1858年創部。
- 27) Richmond Football Club：ロンドンにあるラグビーのクラブで1861年に創部。
- 28) Percy Loyds, *op. cit.*, p. 31.
- 29) Percy Loyds, *op. cit.*, p. 31.
- 30) Percy Loyds, *op. cit.*, p. 31.
- 31) Sir Richard Carew, the *Surrey of Cornwall*, London, 1602, quoted in Shearman, *op. cit.*, p. 258.
- 32) Shearman, *op. cit.*, p. 369.
- 33) Shearman, *op. cit.*, p. 333.
- 34) Shearman, *op. cit.*, p. 333.